

「日本列島はすごい」

一般社団法人 全日本建設技術協会 会長 おお いし ひさ かず
大 石 久 和



最近、「日本列島はすごい」という伊藤孝・茨城大学教授（地球科学）の本に触れる機会があった。われわれ全建会員から見ると地盤条件が悪いうえに、台風・豪雨などの気象条件が他国をはるかに凌駕する厳しさを有している日本列島がすごいなどと言われてもピンとこない感じがするのだが、教授が示した次のエピソードは如何だろうか。

「砂金は日本から（中国への）朝献品リストの重要な地位を占め、留学生もみな砂金で精算するものだから、大陸（の人々）に日本列島には黄金が豊富に存在しているというイメージを植え付ける。これが長安に滞在していた外国商人の耳に届き、尾ひれをつけた黄金のジパング伝説が広まった。」

確かにマルコ・ポーロが中国に来て、「黄金の国ジパング」の話を聞いて世界に広めたことは、われわれもよく聞かされた話なのだが、この「黄金の国」伝説が中国に広まっていた背景は筆者もこの本に触れるまで知るところではなかった。

聖武天皇が相次ぐ飢饉に苦しむ人々を救済するため大仏の建立に着手したところ、なんと偶

然にも宮城県の仙台の北、大崎市近くの涌谷町で砂金が発見され、天皇は狂喜して年号を「天平」から「天平感宝」に改元した。こうして奈良の大仏は鍍金することでき、黄金に輝く仏の姿は人々を狂喜させたのだった。

また、北上山地に多くの金鉱床が発見され、それを財源として平泉周辺には藤原三代の世が華開き、藤原秀衡などの繁栄時代が続き、鎌倉時代の初めに義経を預かったことで頼朝に滅ぼされるまで栄耀栄華を誇った。その力の根源は金の力だったのだ。中尊寺金色堂はその象徴であり、今日もその財力を金の輝きとして、われわれに伝えている。

こうしたエピソードを交えながら、教授は地球科学の専門家として日本国土の厳しい自然環境の特徴を紹介して解説しているのだが、他者の研究も引用しながら、終章においてわれわれに重要な示唆を示している。

その一つは、巽好幸氏が「地震と噴火は必ず起きる」という著書で示した日本の政治行政への重要な示唆、つまり「人口と機能の分散」の必要性である。

もう一つは、ずいぶん昔の話になるが田中角栄氏の「日本列島改造論」である。この中で田中氏は「自己完結性が高い地方都市の整備」を説いており、その重要性は東京首都圏への集中が加速している今、ますます大きくなっているのだが、きわめて残念なことに、今日では「土建屋・田中」の説いた公共事業費拡大論くらいにしか評価されていない。

この田中氏への低い評価と列島改造の否定は大きな間違いだとこの地球科学者は言うのである。氏は「自分たちは日本列島という『じゃじゃ馬』をまったく乗りこなせていない。経験不足のビギナーと自覚したうえで、安全策・消極策を講じるしかないを考える。」と述べているのである。

そして重要な指摘として『「卵を一つのかごに盛るな」は日本列島ではことさら守るべき金言なのだ。』と示している。ところが日本は今、せっせと一つのかごに卵を盛り続けているのである。

筆者もそうなのだが、会員の方々もこの国の政治の運営ぶりにほとんど絶望感しか抱けない感じを持っているのではないか。

政治が東京首都圏一極集中を和らげることができる政策を打てる可能性があったのだ。この事実もマスメディアから国民に提示されたことがないから、多くの人々に気づく機会を与えなかったのである。

それは社会保障の財源だと言いながら、平成元年から約31年にわたって国税地方税合わせて国民から吸い上げてきた消費税がトータル397兆円になったとき、この期間にまったく並

行して法人税の減税が実施され、その規模は国税地方税合わせてトータル298兆円にもなっていたのである(中央大学・富岡幸雄教授による)。

この事実だけでも国民をペテンにかけてきたと言えることなのだが、ここで問題にしたいのは、この法人税減税が「政策目的にはまったく使われなかった」ということなのだ。

地方に本社を移せば、より大きな減税、地方に大きなオフィスを造って多くの社員を移せば減税が強化されるなどといった国策に沿った政策実現には全く利用も使用もしなかったという、一言でいえば「バカそのもの」なのである。

子育て支援を強化する企業への減税でもよかったのだが、要は「複合的思考」がまったくできていないのである。繰り返し紹介しているように、他の先進国、日本以外のすべてのG7国(G6)で「最大人口圏に人や資本が集まり続けていること」などまったくないのである。

G6の首都圏に大地震が起こる可能性は皆無なのに集中など進んではいない。ところが、巨大地震の可能性が極めて高い日本だけが人や資本を集め続けているという愚かさなのだ。

「卵を一つのかごに盛るな」という危険の警告に日本人が気づくことはあるのだろうか。それは、もしかすると関東大震災再来の東京首都圏壊滅の後なのではないだろうか。